

23.4.12-13 長曾我部会長、福島県・宮城県慰問視察

宮城県沿岸部の被災神社を視察して

神道政治連盟会長 長曾我部 延昭

<現在の状況と人々の思ひ>

去る四月十二日と十三日の両日、東北地方太平洋沖地震による被害に遭われた福島県神社庁（足立正之庁長）並びに宮城県神社庁（千葉博男庁長）と、宮城県沿岸部の北は牡鹿郡女川町から南は仙台市まで、被災された神社数社を慰問し、街並を視察した。

宮城県沿岸部は米所として有名な東北地方最大の仙台平野が広がり、津波により広範囲に亙り街が壊滅した。平野ゆゑに所々の高台がないため、残念なことに犠牲者も多く、甚大な規模の被害が齎された現場を視察した。

とくに仙台市若林区の沿岸付近では、海岸線と平行して南北に走る仙台東部有料道路を境に明暗を分けるやうな被害があり、津波の際はこの道路が堤防の役目を果たしたといふ。この道路より海側にあった神社は津波に襲はれてをり、数社倒壊してある凄惨な様子を目の当たりにしてきた。

この視察の中で、神職や被災地で活躍する方々に現況を伺って感じたことについて、去る四月十八日付本紙に打田文博神政連幹事長が記した岩手県沿岸視察報告に引続き、私見を申し述べたい。

<ありがたい温かな食べ物>

牡鹿郡女川町は、日本有数の漁港の一つであり、東北電力女川原子力発電所もあるせみかひじょうに整備された街であったが、津波によりほとんどが壊滅した。女川町の中心部にある町役場跡よりも、少し高台にある白山神社（鈴木静宮司）を遠くに見ることができたが、津波に襲はれ半壊した社殿は、その目前で崖崩れを起こしてゐて近寄ることができなかった。

また、ここでは町立病院の横田栄養士にお話を伺った。町立病院は町内を一望できる高台に位置してゐるが、津波は病院の一階まで襲ってきたといふ。病院には患者と病院関係者が約百五十人をり、隣接する保健施設には多くの避難者がゐた。

横田栄養士からは、行政から提供される物資に、パンや固形物などが多く、いかに多くの患者に温かい食べ物を食べてもらふかに苦心してゐた状況などを聴いた。さうした日々の中で、宮城県神社庁の関係者と東京都台東区・下谷神社（阿部明徳宮司）の神職らによる病院での炊き出しが実施されたのだといふ。

「おかげ様で患者の皆様は、温かくて食べたがってゐたものを提供することができ、うれしさに涙が止まらなかった。この日は応援に来てくれてゐるスタッフも、温かいものを口にすることができ喜んでゐた」と横田栄養士は語る。応援のスタッフらは手弁当での活動であるため、自分たちはカロリーメイトなどを食べてゐたのだ。その後も頻繁に必要な物資の搬入があつたさうで、神社関係者への感謝の意を承った。

横田栄養士が「全国の皆様の支援に支へられ、患者や避難者はお互ひに助け合ひの心で、不便な生活にも拘らず不満を言はずに自分よりも他の人のことを先にどうぞと言って頑張つてゐる。日本人つてすごいですね」と、目に涙を浮かべながら語ってくれたのが印象的であつた。

<境内にたなびく鯉のぼり>

石巻市・伊去波夜和気命神社（大國龍笙宮司）は、津波に襲はれたため損傷は免れなかったが、幸ひにして社殿が無事であつた。周辺の神輿庫や社務所は倒壊状態で、さらに周辺の氏子区域に至つては壊滅してゐた。現在は近隣に住む親類宅から神社に通つてゐるといふ大國宮司によれば、「この地域には、昔から緊急時には神社に逃げるといふ言ひ伝へがあり、社殿に逃げた氏子は助かつた」といふ。

しかし津波による尋常ならざる被害状況を前に、「これから氏子に前向きに生活してもらふために、神社を中心に街の復興気運を盛り上げたいといふ思ひでいっぱいであり、どのやうに工面してゆけばよいか頭を悩ます日々」と語る。

去る四月十日の春祭りには、境内にたくさんの鯉のぼりを立て、氏子総代を集めて祭典を斎行したといふ。「鯉のぼりは五月の端午の節供まで掲げたい」と語る大國宮司の眼差しに、震災復興における神社の役割と神職の使命について考へさせられた。

<地元での復興奉仕の活動>

石巻市・鹿島御児神社（窪木兼忠宮司）は、テレビ等でも多く報道される壊滅した石巻市街地を一望できる高台に位置してをり、鳥居の前の公園には、街に向かって多くの花が供へられてゐた。

眼下に広がる石巻港周辺の工業地帯と市街地には臭気が漂ひ、また、車輛が通過するたびに土煙が舞ひ上がる

ため、マスクが必需品であった。その津波被害は広範囲に亘ってをり、瓦礫の撤去も依然として進まない状況であった。

神社に隣接する施設は避難所になってをり、境内にも多くの避難者が集まってゐた。窪木宮司をはじめ神社の職員は、避難者の生活のための対応に多忙の様子であった。

とくに窪木好文権禰宜は、地元の社団法人石巻青年会議所の理事長でもあり、積極的に鳥居の外に出て、復興に向けた諸活動に関はってゐるといふ。震災以降、体を休める時間はないと語ってゐたが、疲れをおくびにもださず、常に笑顔を絶やすことなく氏子に接する姿に心打たれた次第である。

また、この日は神道青年全国協議会（春木秀紀会長）が石巻市内の三カ所の神社で被災者のために炊き出しをおこなってをり、その様子を伺ふことができた。境内は老若男女を問はずたくさんの人々で溢れ、全国から集まった神青協会員たちの被災者に対する心温まる対応と笑顔が印象的であった。

神青協の会員の一人は現場での活動について、「必ずしもすべてが被災した神社や氏子さんのためになる活動とはいかないかもしれないが、何かをしたいといふ思ひでここに来た。現場に来て、現地のみなさんとさまざまなお話をすることで、おのづとこれからの支援の方法も的確にできるのではないか」と語ってゐた。

<復興に向ける人々の気運>

今回の視察を終へ、東北道で東京に戻る車内のラヂオで、福島県で毎年七月に開かれる神事「相馬野馬追」が今年も開催に向けて準備が進められるとのニュースを聞いた。神事は津波や原発事故の影響で開催が危惧されてゐたが、五郷騎馬会の高田正雄会長は「どれだけの騎馬武者が参加できるかは分からないが、被災者に元気になってもらへるやうに頑張りたい」と語ってゐた。現地の人々のたくましさ深く敬服するとともに、自粛の風潮に流されただけの自粛こそ慎むべきであることを改めて感じた次第である。

作家の曾野綾子氏は新聞のコラムで、「国家がすべて何とかしてくれると考えるのは違う。めいめいが自分で考え、行動する癖を身に着けることだ。それは他人の痛みを部分的に負うことでもある。被災地の支援も国家に頼るのではなく、『痛い』と感じるくらい自らお金を出すことだ。出さない人がいてもいい。だが、そうした人は人権だ、権利だと言わないことだ」と語ってゐた。

今はまさに国難の時である。今こそ斯界が団結し、被災した神社をはじめ、神職や氏子たちの生活や心を思ひ、行動する時である。神政連としても復興に向けた最大限の支援をすべく、神社本庁と連携してまゐりたい。